

「日本国の原則—自由と民主主義を問い直す—」

原田 泰(著)

日本経済新聞社 2007年4月20日刊

本書は現在、論壇で精力的に執筆活動を行っている著者の最新論考である。本書のタイトルにあるとおり、内容は経済に限らず、政治、文化、歴史、哲学を縦横に織り込んだ極めてユニークな日本論になっている。

アカデミズムの世界では専門領域の蝸壺に入り込んで、なかなかそこから抜け出せないのが普通であるが、著者はもともと経済企画庁で日本経済全体を見渡すことを仕事としてきた方であり、また個人的な関心からか、歴史にも関心を払い、古典から現代書までを自由に渉猟し、分野を超えた議論をすることにいささかの躊躇も見られない。

本書の主張は、自由こそが国家発展の鍵であり、自由を保証する形での民主主義の維持が、日本国にとって最も重要だということである。それさえ確保できれば、少子化になろうが、地域紛争が勃発しようが、何とか対応していけるだろうという建設的な楽観論で貫かれている。

著者の全体的な歴史的、政治的判断は極めてオーソドックスでありバランスがとれている。例えば、日本軍が満州国で行ったことは、日本国民の貧困を救済する意味でも、東北中国の発展に寄与するという意味でも全くの失敗であったと手厳しい。一部の歴史学者による満州国およびその統治機構を礼賛するような修正主義には著者は一切与していない。著者は教育についても『型』を身につけることが大切で、個性やゆとりは『型』を突き抜けたところにしかあり得ないと指摘しているが、これも、全く同感である。

著者は自由が大切だとは言っているが、それは無制約に享受されるべきものであるとは言っていない。むしろ、人は制約を受けることで、その中で比較優位を見つけ、それに特化することで生きる道を見つけるべきだと主張しているように思う。日本国民は、島国で、天然資源に恵まれず、地形的に平地は少なく、しかも自然災害の脅威にさらされている環境下で、土地の有効利用、貿易立国の必要性、教育を通じた人的資本の重視などの生き方を、紆余曲折はあったにせよ、理解し選択してきたということであろう。